趣味の継続を支える社会—技術的アレンジメントをめぐって
On the socio-technological arrangements which support continuing hobbies

青山 征彦
Masahiko AOYAMA
成城大学　社会イノベーション学部
Faculty of Social Innovation, Seijo University
aoyama@seijo.ac.jp

概要
ハンドメイドなどの趣味を題材に、どのようにして趣味が継続されているかをインタヴュー調査によって検討した。その結果、母親が同じ趣味に参入したり、母親近い趣味を楽しんでいたりするなど、母親との関係が趣味の継続に影響しているのではないかと考えられた。趣味は、主体に内在するエージェンシーによって維持されているというよりも、主体を下支えする社会—技術的アレンジメントによって可能になっていると言える。

キーワード：趣味、ハンドメイド、社会ー技術的アレンジメント

1. 目的

これまでの心理学や認知科学における学習研究では、教室での学びが議論されることがほとんどで、それ以外の学習としては、わずかに仕事場の学習（上野, 1999）についての研究が見られるくらいであった。そのため、教室や仕事場ではない生活文脈での学びについては、歌や舞踊に関する熟達研究（生田, 2007）や、サブカルチャーにおける実践の研究（岡部, 2008）がわずかにある程度で、ほとんど研究されていないと言って過言ではない状況である。

そこで、本発表では、教室でも仕事場でもない生活文脈での学びとして、趣味に注目する。生活文脈における学びの研究、特に趣味における学びの研究は、教室、仕事場に続く、第３の学習研究になる可能性を十分に持っている。趣味における学びには、誰にも頼まれていないのにも関わらず自発的になされること、長期にわたって継続されることといった点が、教室や仕事場の学びとは異なっている。本発表では、こうした趣味における学びの特徴を明らかにすることで、自発的かつ継続的に学びつつ、実践を継続するためにはどのような仕組みが必要なのか、インタヴュー調査により探索的に検討した。

これまでの認知科学会における発表（青山, 2017, 2018）では、(1)100 円ショップや手芸専門店で必要な材料が入手できる、(2) YouTube などの動画共有サイトで解説動画を利用できる、(3)SNS に投稿された画像を見たり、ハンドメイド作品を扱う店に通ったりすることで、他者の作品に継続的にふれている、といった下支えが、趣味の継続的な実践を支えているのではないかという見方を提示してきた。今回の発表では、これまでに指摘していない側面である家族との関係について、インタヴュー調査をもとに検討する。

2. 方法

すでに青山（2017, 2018）で発表しているものとは別に、以下の３件のインタヴュー調査を実施した。今回の発表では、主にハンドメイド系の趣味を継続しているＮさん、Ｈさんについて報告するが、Ｒさんのインタヴューについても補足的に参照する。

Ｎさん　大学生　女性　アクセサリー制作について
以前の発表でもインタヴューを行っているが、追加の調査を実施した。
Ｈさん　大学生　女性　レジンアクセサリー制作について
Ｒさん　大学生　女性　劇団四季の俳優の追っかけについて

3. 結果と考察

（１）制作のきっかけとしての価格

作品を制作するきっかけについては、昨年の発表（青山, 2018）でも採りあげたが、SNS や店頭で見た作品がきっかけになることが少なくない。インフォマントから繰り返し述べられるのは、作品が高価なために自作するというエピソードである。

例えば、Ｈさんは以下のように述べている。Ｎさんも以前のインタヴューで同様の発言をしている。

H：（ハンドメイドのショップの作品は）高い。めっちゃ高い。めっちゃ高いし、なんかこういうのでも、本当になんか3000円4000円とかするじゃないですか。
―しますします。
H：作れるんじゃないって思い始めて、やっぱそこから。
―やっぱりあの、作り始めてから、作れるんじゃない？という感じになりました？
H：そうです、そうです。はい。これ全然頑張れば作れるよね？って思い始めて。

ただし、自分ではうまく再現できないこともある。Nさんはこうした場合、ふだんなら自作する金額であっても購入している。

N：ビジューのパーツを、なんか自分で作ると、取れちゃうんですよね。前に作ったことがあるんですけど。
―見せて見せて
N：固定するのが難しくて。
（略）あんまり得意じゃなくて、自分で作るのが
ーふーん。
N：だったら、もうこれは作れないなと思って。そんなに値段も高くないんで
ーうん。
N：千いくらとかだから

このように考えると、作品に触れることだけでなく、価格が高いことも自作を促す重要な要素であることが見えてくる。このことも、趣味の実践を継続しやすくする要因と考えられる。

（2）母親の趣味の影響

また、今回のインタヴュー結果からは、母親の趣味がインフォマントの実践に影響を与えたり、インフォマントの趣味を母親も楽しんだりすることで、趣味が継続されやすくなる可能性が指摘できるように思われる。今回の発表では、この点を中心に検討する。

例えば、Hさんは、母親がハンドメイドをしていたことがきっかけとなって、自身が制作するようになったと語っている。逆に自分の趣味に母親があとから参入したという発言も、Nさん、Rさんから得られており、母親との関係は趣味に少なからぬ影響を与えていることがわかる。

H：なんか、母が、もともとなんか、すごい、こういうハンドメイドとか、細かいものを作るのが好きで。で、もう最初からもう材料が揃ってたんですよ。母が全部こういうのとかも、最初に母がやりだして、
―ふーーん。
H：で、なんかもう本当になんていうのかな、もういろんなものに手出しすぎて、いろんなものが揃ってて、で、なんか、レジンもやりたいってなって買ったらしく、で、やる？ってなって。やりたーい！ってなって。ハマった？っていう。

Hさんは、手芸専門店（以下では喜和製作所）を見かけると母親に連絡すると語っている。Nさんも、以前のインタヴューで母親と共同でパーツを購入したと語っていることから、母娘が連携して買い物をすることも、趣味の実践を支えているのではないかと考えられる。ハンドメイド系の趣味ではないが、Rさんはいっしょに観劇をしていた母親も追っかけをするようになったと述べていて、母親という味方をつけることで、趣味の実践が継続しやすくなっている面もあるのかもしれない。

H：一緒にじゃなくて、なんか貴和があったら、とりあえずお母さんに LINE して、欲しいものある？っていって、
―あはははははっ
H：ふふふふっ
―貴和があったら LINE。
H：そう、とりあえず LINE して、
―あはははははっ。
H：あ、なんとか買ってきてーみたいになって、で、ついでに私のも買うみたいな。

―その時点ではお母さんもハマってるの？
M：いや、全然、
―あじゃあ、M さんが、
M：はい
―どハマリしてから、
M：あーそうですそうです
（略）
M：本当に、言われましたなんか、「いやーもう、本当 M がいなかったら、こんなハマってないよ」って

すでに認知科学会で発表した内容（青山, 2017, 2018）とあわせて考察するならば、趣味の実践は、何かを作りたいという強い内発的動機づけをもとに生じるというよりは、100 円ショップ、手芸専門店が提供するリソースと YouTube 等の動画が提供するノウハウが結び付いて可能になることであり、SNS に投稿されてくる作品の画像や販売店で見かけた作品、母親と趣味を共有することがそうした実践を支えているように思われる。アクターネットワーク理論（例えばラトゥール, 2019）のアイデアを援用するならば、趣味は、主体に内在するエージェンシーの発露というよりは、こうした主体を下支えする社会―技術的アレンジメントによって可能になっていると言える。

引用文献

青山征彦（2018）.継続的な実践を支える文脈：趣味のアクセサリー制作を例に．日本認知科学会第 35 回大会　大会発表論文集, p.599-601.

青山征彦（2017）.趣味への参入をめぐってーレジンアクセサリー制作における野火的活動の実際.　日本認知科学会第 34 回大会　大会発表論文集, p.995-998.

生田久美子（2007）.「わざ」から知る．東京大学出版会.

ラトゥール, B., 伊藤嘉高（訳）（2019）．社会的なものを組み直す: アクターネットワーク理論入門. 法政大学出版局.

岡部大介（2008）. 腐女子のアイデンティティ・ゲーム: アイデンティティの可視/不可視をめぐって．認知科学 15(4), 671-681.

上野直樹（1999）. 仕事のなかでの学習．東京大学出版会.